

前にも後ろにも身動きできないほどの人が乗っている中、私はいつものように電車に揺られていた。

朝の通勤ラッシュの時間帯は、特にひどくてぎゅうぎゅう詰めになる。だからつり革や手すりにしがみついて耐えるしかない。後ろにいる人の息が頭に当たってちょっとくすぐったいが、満員電車なのだし仕方ないだろう。それにしても今日は朝から最悪だった。昨日は課長から仕事を落ち着けられて遅くまで残業することになり、寝坊してしまったのだ。おかげで朝ごはんも満足に食べられていない。

(もうすでに帰りたい……)

なんて思っていると、急ブレーキがかかったみたいに車内が大きく揺れた。その拍子に私の体は後ろへと傾いた。

「わっ」

思わず声を上げてしまう。体勢を立て直そうとして踏ん張るが、前の人も同じように倒れてきたためドミノ倒しのように後ろの人にぶつかってしまった。

「な、なに……?」

周囲の人も何が起こったのか分からないようで、戸惑った空気が流れてくる。すると車内にアナウンスが流れた。

『ただいま、線路内に障害物を発見したため緊急停止しております。しばらくお待ちください』
その言葉を聞いて再び周囲がざわつき始める。それも仕方のないことだろう。通勤通学の時間帯でこれから仕事に行かなければならないのに、電車が止まってしまふなんて。

(……遅刻確定かな)

私はスマホを取り出して会社にメールを入れた。事情を説明して、遅刻することを伝える。

上司からの返信を確認しスマホをしまうと、大きな溜め息が出た。

電車に乗ってからまだちょっとしか経っていないというのに、もう憂鬱になってしまった。せめて席が取れていればよかったけど、最寄り駅に到着した時点でほとんど満員になってしまうので、座れたことはない。今日も空いている座席はなかった。入りに口近くの手すりにつかまっていた。

(ああ、早く動かないかな……)

心の中で呟きながら、ギュッと鞆を抱き締めた。

「……?」

ふとお尻に違和感を覚える。誰かが触れているような感触があったのだ。最初は気のせいかと思ったけど、明らかに手が当たっていた。しかもお尻の形に添うように動いている。

(え、まさか痴漢?)

慌てて周囲に視線を向けるが、みんな俯いてスマホを見ているのか分からなかった。

だけど間違いなく手は動いていて、スカートの上を撫で回している。時折下着の縁を確かめるように指先でなぞられる。そのあからさまな動きに肌が粟立った。

(どうしよう……)

恐怖を感じながらも、振り向く勇氣はない。もし振り向いて目が合ったらどうしようと思うと怖かった。相手を刺激しないようにじっとしているしかない。私は唇を噛んで息を押し殺すように耐え続けた。

そうこうしているうちに、手が離れた。良かった……と思つてホッと息を吐いた瞬間、今度はスカートの下から太ももの内側を撫でられ始めた。

「ひ、」

ストッキング越しに感じる生暖かい手にぞわぞわとしたものがこみ上げてくる。

思わず悲鳴を上げそうになったけど、何とか堪えた。ここで悲鳴を上げたら周りの乗客にも気付かれてしまうかもしれない。早く駅に着いてほしいと思いつながら耐えるしかなかった。

「あ、」

手が前に回ってくる。太ももを撫で回していた手が、徐々に上に上がっていく。そして足の付け根ギリギリまで来ると、また戻っていった。

それを何度も繰り返すうちに、何だか変な気分になってきてしまった。最初は触られることへの嫌悪感しかなかったのに、だんだんと別の感覚に襲われるようになっていた。

まるで焦らされているかのような動きに、だんだん息が荒くなっていく。無意識のうちに太ももを擦り合わせてしまった。

(嫌なのに……)

自分の体の変化が信じられなかった。私はノーマルな人間だと思っていたのに、痴漢で感じてしまうなんて。悔しくて涙が出そうになる。

「ん、」

シヨーツの上から割れ目をなぞられる。驚いてビクツと肩が震えた。そして何度も往復するように上下に擦られる。彼氏と別れて数年、時折自分で慰めるぐらいにしか触れられなかったソコが、次第に熱を持ち始めてしまった。

「ふ……う……」

自分の口から甘い吐息が漏れるのを抑えられない。つ、とストッキングを指でなぞられ、時折カリツと引っ搔かれる。その僅かな刺激さえ、電車という通常ではない空間では快感として拾ってしまった。

(もう嫌だよ……誰か助けて)

必死に頭の中で助けを求めるけど、気付かれないという気持ちも強く、必死に声を抑えていた。その間にも痴漢の手は止まらない。どんどん高ぶっていく体をどうすることもできないまま、私はただ耐えることしかできなかった。

そんな時だった。

『大変お待たせいたしました。復旧作業が終わりましたので間もなく発車いたします』

車内アナウンスが流れ、電車が動き出す。それに合わせるかのように、スカートの中に入っていた手も離れていった。

私の心の中ではやっと解放されたという安堵感と、中途半端に高められた体の熱が辛いという気持ちが入り交じっていた。

(早く駅について……)

そう思いながら、ギョツと唇を噛んだ。

「ううっ……」

カーテンの隙間から入る太陽の光が眩しい。もう朝なのかと思いつつ、私は目を覚ました。昨日は散々だったから今日はお昼まで寝ようかと目覚ましもかけずに寝たはずなのに、平日と同じ時間に目が覚めてしまった。

「はぁ……」

寝返りを打つとアソコがクチュと音を立てた。

今日も変な夢を見た。痴漢にあつてからいかがわしい夢を見るようになってしまい、欲求不満なのかと思って寝る前にオナ

ニーをするようになったけれど、それでも知らない誰かに体を弄られる夢を見てしまうのだ。今もまだ少し疼いているような気がする。あの刺激が忘れられず、身体が熱をもって仕方なかった。

だけど自分で触ってみても、あのような快感は得られない。むしろ物足りなさが増すばかりで、余計に辛くなってしまふ。

(あんなこと二度とされたくないのに……)

そう思うのにあの手を思い出すだけで身体が熱くなるのが分かる。私は頭を振って強制的に思考を遮断すると、ベッドから降りた。

(今日は天気もいいし、洗濯と掃除をして気分転換しようかな)

就職して一人暮らしをするようになってから、毎日家事をこなすのが難儀になっていた。部屋も油断するとすぐ散らかってしまい、最近は物をなくしてしまうことが多かった。

「……あれ？」

洗濯かごを抱えたとき、昨日放り込んだはずの白いレースのショーツがないことに気づいた。セットのブラはあるのにシヨ

ーツだけなくなっている。不思議に思いながらも、また後で探せばいいかと思いい直した。

朝食を食べて洗濯機を回している間に部屋の掃除をする。一通り終わる頃にはすっかり正午を過ぎていた。

「お腹空いたな……」

何か食べようかと冷蔵庫を除くと、見事にすつからかんだった。どうやら買い物に行く必要がありそうだ。

コンビニもすぐそこだし部屋着の上に何か羽織るくらいで平気だろうと思い、簡単に準備して部屋から出た。すると私が出たのと同時に隣のドアからも人が出てきた。

「あ、おはようございます」

「っああ、お、おはようございます」

隣人である男性に声をかけると、彼は緊張したように鞆のひもを握り締めながら挨拶を返してくれた。なんだかぎこちない感じだ。それもいつものことで、この人は引越してきた当初からずつとこんな調子なのだ。

分厚い眼鏡にボサボサの髪。それに顔を隠すように前髪を長く伸ばしているせいでほとんど見えない。身長は高く体格は良い方だと思うけど、猫背気味なのであまり大きく見えなかった。その風貌のせいで最初こそ警戒していたものの、何度か話

すうちに緊張しやすいだけということが分かった。それからこうしてたまに会えば挨拶を交わすようになったのだ。

「世良さんもお出かけですか？」

「え、あは、はい……ちよつと、そこまで」

「そうなんですか。……あ、私コンビニに行つてきますね」

「え！？あ、ああ……気をつけてください……」

彼は相変わらず挙動不審だ。だけど不思議と嫌悪感はなく、大きいのに小動物を見ているようで可愛く思えるのだ。

「大丈夫ですよ。世良さんこそ気を付けてくださいね」

「え……あ、はい……ありがとうございます……」

ぺこりと頭を下げた私はコンビニに向かった。

コンビニで目当てのカップ麺とおにぎり、それにお弁当を買って部屋に戻る。

「あれ？鍵かけ忘れてたかな？」

部屋に戻ると鍵が開いていた。おかしいなと思いつつも、まあ少ししか家を空けてないしと深く考えずに部屋に入った。